

こさはんの前には、昔は川が流れていて、どんどこができていた。そこにはカッパがすんでいた。カッパは川辺の畑で胡瓜を食べ、腹がふくれると、子どもに化け、村の子どもたちと河原で相撲を取って遊んでいた。その日も、村の子が河原へ行って遊ぼうと思ひ、おじいさんに「河原へ遊びに行ってくるぞの。」と出して出かけようとしたら、おじいさんが、「おい、ここにお供えしたござんさまがあるでー服いただいていけや。」といったので、ひとつ食べて出かけた。河原で待つ友達に近付くと、友達が「何時もと違う。何時もと違う。」といて喚きだした。そして化けの皮が剥けて、カッパの姿にもどって川へ逃げていったんじやとりの。ござんさまのお力はほんとにたいしたもんやのう。



②4 ふたあたまの白い蛇

この頃ではあまり見かけないが、昔は草むららを棒でつつきながら蛇取りが来たものだ。

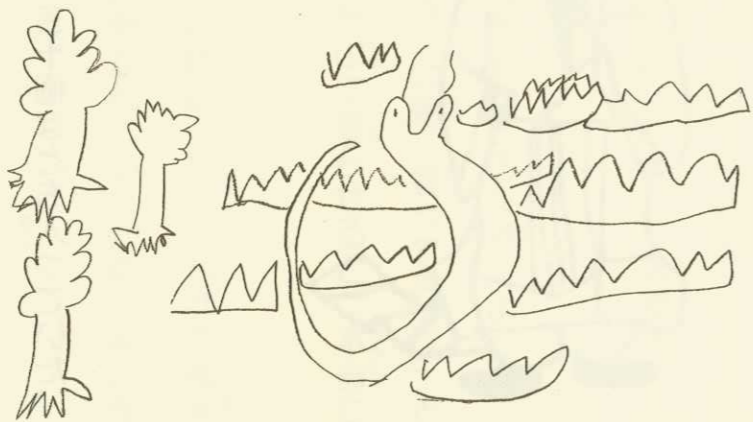
ある日寺中に来た蛇取りは、頭が二つある白い蛇をみつけた。

「いりや珍しい。見せ物にできるぞ。」

と、喜んで桶に入れて持って帰ろうとしたが、桶は急に重くなって持ちあがらない。

このとき蛇は、いつも住んでいる家の人の夢枕に立って、「私は今、連れていかれようとしています。早く助けてください。」とたのんだ。

家の人驚いて起きてみると正夢だったので、すぐに蛇を放してもらった。



白い蛇はそれからずっと悦相院というお寺の大杉のほら穴に隠れ住んでいた。

この杉は何百年もの年をとって、穴が大きくなって倒れそうなので、近年切られてしまったが、穴の中には、なんと鶏卵ほどのぐにやぐにやとした大きな蛇の卵が、三十個ほども入っていた。

25 九条道家さま

建長二年(一二五〇年) っていうで、ずいぶん昔

のこと、九条道家さまが、自分の莊園(領地)があった縁でかの、亡くなられる二年前に、この河和田の里においてになって四ヶ月すこされたんやと。

道家さまは、摂政・関白にまでなられて大それたのあったお方や。河和田には何かよい鉱脈がありそうだと、あちこちお供の人とさがしまわられ



た。けど、どうしても見つけれなんだ。

そこでの、織田の劔神社の忌部司を招いて、片山の八幡神社に三七日(二十一日間)の祈とうをなされた。そして宿にお帰りになった夜、衣冠束帯姿の立派な方が現れなされて、道家さまにおっしゃった。

「私は、この神社の神である。そなたの心がけに感心した。宝石のあるところを教えよう。ここから北の寺中の山にのぼって、峰より三合下の所に砥石がある。明日の朝、登ってみよ。」とおっしゃると、ふっとお姿は消えてしもた。道家さまは、お供の人を山に登らせると、本当に砥石があったんやと。これが寺中の砥石のはじまりやそうな。

道家さまは、お帰りのとき、記念に片山の八幡神社に杉の木を植えられた。村人たちはご神木として大切に育てたんで、それはそれは大きい木になった。二またに分かれていたがの。長い年月には、雷のおちたあともあった。まわり十メートルほどもあったやろ。

台風でかたむいたんで、昭和四十年に惜しまれながら切りたおされてしもた。